

新書紹介

事実からの発想

柳田邦男著

講談社A5判 三四二頁 一、三〇〇円

ドキュメント、ルポルタージュなどの「ノンフィクション」が数多く出版され読まれるようになってきたのは、この一〇年ほどのことである。その書き手の一人、柳田邦男氏が内外一〇人のノンフィクション・ライターと、テーマ意識や取材の方法について語りあっている。

ノンフィクション・ライターには新聞社などの組織ジャーナリズム出身者が少なくない。「取材体制、編集方針などがあまりにもシステム化されていて、一定の方程式に情勢をあてはめてメディアの責任を果している」大量の情報提供機関の意義は大きいが、「決定的に欠けているのは、ほんとうの人間の生き方とかその真底にあるものを徹底

的に書くとか、テーマによって五年でも十年でも追及して一つのものを書くとかですよ」(柳田氏)という思いがある。

ノンフィクションは、だから既成のジャーナリズムの提供しえない現代社会のさまざまな面に深く切り込んでいく。「それがジグゾー・パズルの一つ一つのコマのように集まって、初めて現代と現代における人間の全体像が描かれることになる」(柳田氏)わけであり、生きた歴史を書く作業でもある。

どのライターにも共通していることは、事実検証へのたいへんな努力と事実確認への厳しさである。「締切り時間に追われて不完全な情報で全体を構成してしまいう新聞記事というもの

は、資料にはなりえない。はたしてほんとうであるかをもういちど調べなければならない」(柳田氏)。取材に際しても「既成のジャーナリズムとの付き合いを重くみるニュース・ソースほどフリーランスには玄關払いを食わせようとする。そういうソースに頼っているのでは、新聞記者と同じものしか書けない。違うフィールドにいかなきやいけない」(上前淳一郎氏)。

取材には多くのライターが三年も五年もの歳月をかけている。「いちばん難しい問題は、真実を知っているかも知れない人を探しただけでなく、その人たちが長い年月沈黙、あるいは隠していたことを公開するよう勧め、話してもらうことです」(ジョン・トーランド氏)、「二世

代もたつてくると、秘密になっていた資料が公開されるとか、関係者が今だから話そうというところで真実を語ってくれる」(ドミニク・ラピエール氏)、というように、ねばり強く事実が追求されている。「隠されている二重帳簿の裏帳簿を発見すること。それが政治や経済や社会や

時代の全体像を正しくつかむ上で非常に大事なこと」(柳田氏)なのである。そして「取材によって集まった山のような生の資料を、きびしいシステムを使って吟味し、歴史の本流にのり、意義のある資料だけを残していく」(トーランド氏)、「五年たつても十年たつても価値のあるもの、記録に値するものは何だろうという目で見る」(柳田氏)というように、選択眼の重

要さが語られている。このような努力で集め、選択した「事実をもって語らしめる」のがノンフィクションなのであるが、そこには「確認された事実だけで書かなければならない」(柳田氏)、「ノンフィクションはなまじこれが事実であるというごとのために、書いてしまつたら逃げ場がないんですね。イマジネーションをいっさい禁じ、つまり手を縛り、足で集め裏づけをとった事実だけで書く」(澤地久枝氏)という厳しい縛りが課せられている。しかし「これだけ注意していても現実にはずいぶんミスをしていきます」と柳田氏は語る。九九パ

ーセント間違いないと信じ、あとの一パーセントを確認できないまま書いてことが間違っていたことがあるという。そして「功妙に『事実』をつくり上げれば、書いた本人にしかわからない。このことに対しては、審判者は書き手の心の中にしかない」(澤地氏)というノンフィクション・ライターのモラルの問題がある。

さらに、集めた事実については確認がとれても「全体のどこまでを見たかということ自体がはつきりしないので、いつも書くときは未知の部分がどれだけあるかを考えていくことが大切であると、限界への配慮が語られている。

「事実」を追求し検証することの難しさ、厳しさを改めて痛感させられる。マスコミの第一次情報を別の情報源で補完していくとき、ノンフィクションは重要な位置を占める。われわれが仕事で情報を集め、資料を作る場合にも貴重な示唆を得る書だ。八企画財政局都市科学研究室副主幹 北小路 清V